慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鴎外の史伝と社会史
Sub Title	Ogai's historical biographies and social history
Author	草光, 俊雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.3 (1993. 10) ,p.293(131)- 304(142)
JaLC DOI	10.14991/001.19931001-0131
Abstract	
Notes	特集 : 社会史と文学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻3号（1993年10月）

鷗外の史伝と社会史

草　光　俊　雄

"Style is the art of the historian's science."
Peter Gay ; *Style in the History*
(Basic Books, Inc. New York, 1974)

木下杢太郎は「森鷗外は謂はばテエベス百門の大都である」という名文句を残し，鷗外文学の多角性，その全貌を極めることの困難さを示唆している。その鷗外の作品中，いわゆる史伝と呼ばれるものは，百門のなかでも最も大きい大門であり，一際高く聳えている。しかしそれはなかなか入るのに難しい門でもある。

私が初めて読んだ森鷗外の史伝は『澀江抽斎』だった。青年時代はどちらかと言うと夏目漱石を愛読していて、鷗外は『雁』『舞姫』などを除いてどことなく敬遠していたのだが，その頃彼の史伝を読んでいたとしても，きっと途中で投げ出していたに違いない。鷗外の史伝を読んだのは私が三十代の後半に入ったばかりの時であり，歴史研究をまがりなりにも始めたところであった。もちろん鷗外の史伝が難しい作品であることには変りがない。とりわけ漢学の素養のない私のようなものにはその作品のすべてを味わい得たとはとても言えない。しかしそれでも『澀江抽斎』を読みながら彼の筆にぐいぐいと引き込まれていったのである。

では一体鷗外の史伝の何がそんなに魅力的であったのだろうか。少くともそれまでの私の知識では，晩年の鷗外は自分の軍人，医師としての地位に不満で，そのためにどこか憑かれたように歴史へと沈潜していった，否むしろ逃避していったのだ，といった解釈や，江藤淳がどこかで言っていたように，鷗外にはすさまじいまでの心の痛みがあり，それが彼を無味乾燥な歴史的資料へ埋没させていった，といったどちらかというと負のヴェクトルを背景としたイメージが強かったのも，私を史伝から遠ざけた理由かもしれない。史伝を非常に高く評価し，日本文学の中でも最高の位置を与えている石川淳や唐木順三，そして近年の鷗外研究では群を抜いている富士川英郎などの鷗外論を読んだのは，もっと後のことであった。

しかし今思い返してみると，私が『抽斎』に惹かれたのは文学作品としてというよりも，むしろ歴史を読んでいるという実感からではなかったかと思う。その歴史の方法や叙述が実に爽やかで新鮮に思ったのである。歴史家としての鷗外の姿が彷彿としてくるのであった。

私が慶應義塾で学んだのは主として経済学史であり，故遊部久蔵先生が指導教授だった。歴史の勉強を本格的に始めたのは，イギリス留学の時である。私がでかけた1970年代の半ばは幾つもの新しい歴史研究の流れが活潑に行なわれていた。労働史協会やヒストリー・ワークショップ，オーラル・ヒストリー協会といった研究会や学会には熱心な研究者や学生たちが集まって来ていた。またフランスからのアナル学派の影響も見られはじめていたし，ケンブリッジのピーター・ラスレットに率いられた人口史も足場を固めつつあった。いってみれば，今日広い意味で「社会史」と呼ばれる研究が勢いを持ち始めていた時期にあたる。そうした歴史研究の新しい息吹の中で，自分なりに手探りで勉強をしていた私に，鷗外は実にモダーンな，新しい社会史をすでに60年も前に開拓していた歴史家として映ったのだった。

鷗外の史伝に精彩を与えているものに「聞き書き」がある。私が『澀江抽斎』を初めて読んだ時に，まず最初に思ったのは，ああ鷗外はオーラル・ヒストリーを使っていたんだな，ということであった。不思議なことに，この点を強調している論者はほとんどいないと思われる。私自身の研究は19世紀前半がその対象だったのでオーラル・ヒストリーは直接自分に関係あるとは思わなかったが，この手法を用いることによって優れた研究を行なっている研究者が周りにたくさんいた。この方法は特に文献資料あるいは史料をほとんど残すことのなかった労働者やその家族の歴史を知るには非常に有効であると考えられていた。その成り立ちが比較的新しく，市民権を得ようという意気込みが当時のオーラル・ヒストリーのリーダーたちに見られ，その一人でオーラル・ヒストリー協会の会長を務めているポール・トムスンもオーラル・ヒストリーは「歴史の本性の第一にあげられるもの」と述べている。彼はヘロドトス，ビード，クラレンドン，スコット，ミシュレ，メイヒュー等々の歴史家がいかにオーラル・エヴィデンスを利用したか，しかもそれが彼等の歴史研究の中枢に位置していたかを示し，少くとも19世紀末まで，文献史料偏重の歴史は存在せず，それはドイツ，とくにランケ流の歴史研究と歴史学の制度化によってもたらされたものである，と論じている。

今日，オーラル・ヒストリーはかなりの程度体系化され，インタヴューの方法なども洗練させられてきている。学界で支配的な文献資料重視に対して，客観性を主張するためでもあろう。また文献資料と絶えず突き合わせることによって，主観的になりがちな口述記録をチェックする努力も行なわれている。それは，大学などにおける制度化された歴史研究に食い込むための必要なステップであり，オーラル・ヒストリーを「科学」として成立させようという意志の表れかもしれない。

トムスンによれば，今世紀初めのケンブリッジ大学の経済史の大家ジョン・クラッパムも実業界に活躍する企業家たちの「聞き書き」を奨励したそうであるが，オーラル・ヒストリーは，どちら

かというと，民間の歴史家（大学以外のという意味で）に優れて採用された手法であると言えなくもない。というよりは，より正確には歴史が歴史学となり科学となる過程で，それまで支配的であったオーラル・ヒストリーがその地位を失っていったというべきかもしれない。

わが国でもそれと丁度同じような経過を辿ったといえる。

松島榮一が筑摩書房『明治文學全集78』「明治史論集(二)」の解題の中で，明治中期に現われた重野安繹や久米邦武等による、いわゆる抹殺博士・“抹殺論”と呼ばれた，一つの思惑を持って歴史を書く態度を排し，「史實を考え，實證を求め，直接にその史實を實證する，實物や古文書の存在に，大きく眼を開き，それを手がかりに批判的に歴史を考えなおす」という主張の背景を次のように論じていることは，この点大変興味深い。

> 重野と久米は，幕末の昌平黌の出身であり，とくに清朝考證學風の影響をうけている……太政官の修史館・修史局に參加し，その中心となってきており，とくに「大日本編年史」編纂の主導者でもあった。そして文部省御雇教師のドイツ人リース博士による，ランケ史學の移植は，わが國における近代史學形成の上の，大きな機會であったが……それらを理解するわが國の史學者が，清朝考證學など漢學の智識の豊かな人々であった點は，注目に價する事實であるとせねばならない。そうして，やがてこれらの人々を中心とする帝國大學文科大學史學科また國史學科を中心とする官學アカデミー史學の形成が，考證的學風を出發點としておこなわれたことは，當然の成りゆきであるが，その本質と限界は，さらに歴史研究の深まりのなかで，漸進的に訂正されたこともいうまでもない。

鷗外の場合こうした影響を一方で強く受けていることは否定できない。作家大岡昇平はやや冷めた視点で日本の事情の特殊性と鷗外の史伝との関係について語っている。

> 『愚管抄』『神皇正統記』の思弁的歴史の傾向は，新井白石『読史余論』まで，系統が辿れるかも知れない。しかし白石はすでに清の実証史学の影響も受けていたのである。こういう考証趣味は江戸市井の野史，随筆の中にもあって，明治に到っている。
>
> しかし，これらは多くの場合，無定見な羅列主義でなければ，病的な瑣細主義であった。明治以来流入した西欧の文明史的史観に触れて，一見中断したように見える。しかし明治初期の戯作者の「実録物」にも，民友社の「史伝」の中にも，その痕跡を止めている。鷗外が二，三の歴史小説の秀作を残しただけで，あわただしく「史伝物」にのめり込んで行った理由は，彼の精神形成の初期にあったこういう伝統から説明されよう。

たしかに鷗外が考証を第一に考えたことは否定できない。そもそも鷗外が澀江抽斎という儒家医師に関心を寄せるきっかけとなったのは，彼が江戸時代のいってみれば武家の紳士録である『武鑑』を蒐集し始めてからのことであった。乃木将軍の自殺をきっかけに『興津弥五右衛門の遺書』を書いてから鷗外はいわゆる歴史小説を次々に発表していった。その執筆のために必要な資料が『武鑑』であった。彼が古書店などから集めた『武鑑』の中に澀江といった蔵書印を押してあるも

のが多かったこと，そしてそれらの中に抽斎という名で書かれたコメントが記されているものがあり，いつしか鷗外は澀江氏と抽斎とが同一人物ではないかと推測するようになる。自分と同じように古い『武鑑』を蒐集していた人物，そして自分と同じように『武鑑』の中の誤りを訂正したり注を設けていた人物は一体誰だったのかと思い調べを開始する。そして自分の推測が当っていたことから精力的に抽斎の追跡が始まった。

この『澀江抽斎』の最初に出てくる『武鑑』蒐集があまりにも熱心に書かれているので，鷗外の歴史へのアプローチが史料中心主義であるかのごとく主張する論者も多い。もちろん『武鑑』だけでは歴史を書けないことは，紳士録やWho's whoを何年分も揃えて読んでもそこから歴史が書けないのと同じであるが，鷗外が史料を極めて重要に考えたこと，そしてその蒐集（情報を含めて）を執拗に行なったことなど，歴史家として鷗外を考える時にきちんとおさえておかなければならないことであろう。彼が『武鑑』について展開する蘊蓄や，公共の図書館に完全なセットの無い不備を指摘するところなど，今日の歴史家が読んでもなるほどなるほどとか，そうだそうだとうなずかせられるところが多い。

しかし話を元に戻すと鷗外という人は事実の探索のために友人，知人，学者，市井の研究家たちに頻繁に問い合わせの手紙をしたためたばかりでなく（彼の史伝は「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載されたため，鷗外は読者にも情報の提供をしばしば呼びかけさえした），ひとたび抽斎のことをアイデンティファイするとその子孫を訪ねて情報を集めていることである。つまり書かれた史料だけでなく関係者からの生の資料をも同等に重要視していることである。そしてこれが彼の伝記を精彩のある生き生きとしたものにしている理由の一つであると思う。鷗外は自分ではあまりすすんで人を訪ねたりすることを好まない作家であった。「逢ひたくて逢はずにしまふ人は沢山ある。それは私の方から人を尋ねるといふことが，殆ど絶対的に出来ないからである」と言っている。長谷川辰之助（二葉亭四迷）も鷗外の「逢ひたくて逢へないでゐた人の一人であつた。私のとうとう尋ねて行かずにしまつた人の一人であつた」が，この場合四迷が鷗外を訪ねたので二人は会うことができた。これほど人を訪ねることの少ない鷗外が抽斎の子孫を訪れ，また墓を尋ねる。公務で多忙な中にもより多くの素材を求めて人を訪ね歩く姿は歴史家の姿でもある。それは抽斎について文献だけからしか伝わらないものでは満足できずに，さらに多くの情報を手にしたいという欲求と共に，抽斎の人間的な面について彼を実際に見知っていた人々から聞き出したい，ということではなかったかと思う。

上に見たトムスンによれば，聞き書きの伝統を最もよく活かした歴史研究は民謡や民話の蒐集，歴史小説，そして伝記や自伝があり，自覚的なコレクションが17世紀後半，とりわけ18世紀に発達したそうであるが，例えば有名なジョン・オーブリの『名士小伝』（ブリーフ・ライヴズ）は多く聞き書きから成っている。このように，誰かの伝記を書こうとする場合に，その人が百年も二百年も以前に死んでいればともかく，子孫や親戚，友人知人などとのインタヴューは欠かすことのできない

手順であるが，鷗外はおそらく日本におけるその先駆者であったといえる。

彼は抽斎の史伝の後で，『寿阿弥の手紙』，『細木香以』，『小島宝素』など比較的短い，『抽斎』から派生した副産物ともいえる小伝を書いた後，『伊澤蘭軒』『北條霞亭』とさらに大部な史伝を次々とものにしていくことになるが，それらの中でもこの態度は変わらなかったといえる。ここで少し鷗外のオーラル・ヒストリー（彼がそのように自覚していたかはともかく）についての見解を見ていくことにしたい。このことは究極的には，歴史とは何か，どのように歴史を書くか，という大きな問題に逢着するのである。まず，先程引いた二葉亭四迷について書かれた小品「長谷川辰之助」に興味深い一節がある。これは明治42年，即ち二葉亭がインド洋上で不帰の人となった年に書かれたものである。ある日、長谷川が鷗外を訪れた。「話をする。私には勿論隔(へだて)はない。先方も遠慮はしない。丸で初て逢つた人のやうではない。何を話したか」。こう書いておいて鷗外は自分の筆先一つで二葉亭を自分よりもえらくも詰まらなくもさせることができる，と言っている。そして話し相手は書かれた内容について反駁も取消もできないと注意を向けて次の様に記している。

> 何事でも，それを見聞したといふ人の伝へは随分たしかな筈である。自ら其局に当つたといふ人の言ふことなら，一層確な筈である。
>
> 併しどこの国にも沢山あるメモアルなんぞといふものは，用心して読むべきものであらう。意識して筆を曲げたものがあるとすれば，固より沙汰の限である。縦令(たとひ)それまでゞなくとも，記憶は余り確なものではない。誰の心にも自分の過去を辯護し修正しようと思ふ傾向はあるから，意識せずに先づ自ら欺いて，そして人を欺くことがある。

この文章は個人の記憶の不確かさと，記録というものに対する懐疑の表明である。それはもちろん記録にたいする否定ではない。慎重さを要する，あやふやなもの，白にも黒にもなりうるものと考えているようである。これは彼が歴史小説を書く二，三年前のことであり，最初の史伝「澀江抽斎」を書く七，八年前である。この記憶や記録にたいする留保は『抽斎』を書く前年に発表された「歴史其儘と歴史離れ」では「わたくしは史料を調べて見て，其中に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた」という態度に変っていく。また「メモアル」についても，『伊澤蘭軒』では幾らか鷗外のスタンスに変化が生じている。

> しかし口碑などと云ふものは，固より軽しく信ずべきでは無いが，さればとて又妄に疑ふべきでも無い。若し通途の説を以て動すべからざるものとなして，直に伊澤氏の伝ふる所を排し去つたなら，それは太早計ではなからうか。

ここでは，口碑（言い伝え）に通説をひっくり返すかもしれない事実解明の可能性を見るというように積極的な役割を期待する鷗外がいる。この当該の箇所は，鷗外が通説にあえて疑義をはさみ，若き頼山陽が伊澤蘭軒宅に一時期逗留したのではないか，ということを伊澤家に伝えられている話からその可能性を示唆しようとしている。近年富士川英郎によって，鷗外の仮説には相当無理があり，そのために鷗外は後の方で論に筋を通すためにかなり苦しい説明を余儀なくされている，とい

う明解な指摘がなされているので鷗外の思惑ははずれてしまったのであるが，そのことが鷗外の言っていることの一般的な妥当性がなくなることを意味しない。

鷗外はまた関係者の証言が持つもう一つの積極的な側面についても肯定的に考えるようになったと思われる。蘭軒の長子伊澤榛軒の娘柏，後の曾能刀自から多くのエピソードを聞いてそれを榛軒の人物を語るのに用いた。「榛軒の生涯は順境を以て終始したので，その人と為(なり)を知るべき事実が少い。わたくしが刀自の此一話に重きを置く所以である」と。まだここでも事実＝文献といった考え方が強いようであるが，この態度はおそらく変ることはなかったであろう。しかし，エピソードだけで成り立つ歴史は危ういものであるが，エピソードが歴史に膨みをもたらすことも事実であるし，ことはどのような歴史を書くかという点に大きく係ることである。これは文体の上からもテクストに変化を与える結果となる。特に『伊澤蘭軒』の後半は聞き書きによるアネクドートが多用されているが，それまでの漢詩を中心としたスタイルから口語体で書かれた臨場感のある会話が挿入され，読む者をホッとさせると共に当時の様子が生き生きと活写させられていることに気づくのである。

主人公の時代が書き手の時代に近ければ近いほどその有効性は増大する。蘭軒の子で榛軒の弟の柏軒について記述を終えて鷗外は聞き書きのメリットをこう言っている。

> 柏軒の世は今を距(き)ること遠からぬために，わたくしは柏軒の事を記するに臨んで，門人の生存者三人を得た。志村，塩田，松田の三氏が是である。就中松田氏の談話はわたくしをして柏軒の人となりを知らしめた主なる資料であつた。松田氏の精確なる記性と明快なる論断とが微(なか)つたなら，わたくしは或は一堆の故紙に性命を嘘(ふ)き入るゝことを得なかつたかも知れない。

資料提供者へのコンプリメンツを差し引いても鷗外が「談話」を重視するようになったことは明らかである。これは必ずしも歴史家鷗外の内部に小説家鷗外の顔が現れたというわけではなかろう。歴史の「自然」を追窮することと矛盾することではなかったし，「故紙に性命を嘘き入」れることはある意味で歴史家の大切な仕事だからである。

鷗外は一方でオーラル・ヒストリーを用いて叙述に彩りを与えたが，他方文献，特に定説を成している資料の文献批判にも熱心であった。蘭軒の年長の友菅茶山の朝顔（牽牛花・朝貌）について蘭軒に宛てて書かれた手紙の内容を調べるところがある。他の多くの箇所と同様に，花鳥風月を楽しむ文人サークルの雅を思わせる二人の交際であるが，そこで老茶山の記憶の誤りを指摘していう。

> 啻(たゞ)に書の尽(ことごと)く信ずべからざるのみではない。古文書と雖，尽く信ずることは出来ない。★州の牽牛花の種子は何年に誰から誰に伝はつても事に妨(さまたげ)は無い。わたくしの如き閒人の閒事業が偶(たまたま)これを追窮するに過ぎない。しかし史家の史料の採択を慎まざるべからざることは，此に由つても知るべきである。

これは，「長谷川辰之助」で述べた記憶や記録に対する懐疑を確認しているというよりも，自分の探査によって文献の誤りを発見した得意が感じられる文章であるが，一見他人には仔細なことを

も追窮の手をゆるめない真の歴史家の姿が彷彿としてくるのは私だけではないであろう。

史伝を書き進めるにあたって鷗外がオーラル・エヴィデンスに新たな意義を見出していったことを見てきたが，文献についても鷗外の選択の眼が変化してきていることに、ここで注目しておきたい。もちろんそれは彼が記述に正確さを求めたい，真実を得たいという欲求から来ているという注釈付きなのではあるが。鷗外は頼山陽の臨終の場面について，手に入った史料を幾つか検討した結果，これまでの定説に疑問を持った。その一つは山陽が死ぬ時に眼鏡をかけていたのかどうか，というものであった。

> わたくしは山陽が絶息の刹那に，其面上に眼鏡を装つてゐたか否かを争ふことを欲せない。わたくしは惟(たゞ)正確なる山陽終焉の記を得むと欲する……江木鰐水(がくすゐ)は頼山陽を状したが，山陽が歿した時傍(かたはら)にあつたものでは無い。それゆゑわたくしは傍にあつたものの言(こと)を聞かむことを欲する。就中わたくしの以て傾聴すべしとなすものは小石氏里恵の言である……若し此に積極的言明があつて，直接に里恵に由つて発表せられてゐるとしたなら，その傾聴するに足ることは何人(なにひと)と雖も首肯すべきであらう。然るに此の如き里恵の言明は儼存してゐる。人の珍蔵する所の文書でもなく，又僻書でもない。田能村竹田の屠赤瑣々録(とせきさゝろく)中の里恵の書牘である……わたくしは敢て貴重なるものを平凡なるものの裏(うち)より索(もと)め出さうとするのである。

小石氏里恵とは山陽の妻である。こうして鷗外が里恵の手紙を引用し，山陽の死に際して眼鏡を付けていたことなど書かれておらず，伝説が作り上げられたものであることを示すのだが，ここで鷗外の言う「敢えて貴重なるものを平凡なるものの裏より索め出」すとは一体どういうことなのであろうか。真実をどこでも手に入れることのできる平凡な資料から明らかにする，あるいは女の書いた誤字のあるような（鷗外は引用するにあたって「原文の誤字，仮名違の如きは，特に訂正して読み易きに従はしめる」と言っている）手紙も時には真実を表わすのにかけがえがない，といっているのであろうか。いずれにしても鷗外が「歴史其儘」，あるいは歴史の自然と言っていたものの内容が，史伝の中ではより具体性を持ち，歴史を書くということ，歴史の真実というものの厚みが生じてきていること，これが史伝の魅力の大きな一つであろう。

森鷗外の史伝の魅力の一つ，それはこのエッセイで見ようとしている社会史的なものばかりでなく，多くの文学者などが指摘しているように標題の主人公，澀江抽斎，伊澤蘭軒のみならず，彼らの子孫の略歴が綴られていることが挙げられる。古くは永井荷風が1923年に発表した『隠居のこゞと』で『澀江抽斎』の面白さの一つに「傳中の人物を中心として江戸時代より明治大正の今日に至る時運變動の迹を窺ひ知らしめ讀後自づから愁然として世味の甚辛酸に，運命の轉黯然たるを思はしむる處にあり」と指摘していたことではあるが，『抽斎』を執筆するに到った契機は上にも述べたように偶然に自分と同じように『武鑑』を蒐集している人物に興味を持ったのだが，それが息子の澀江保や娘の杵屋勝久の代まで物語られることになり，また『伊澤蘭軒』（抽斎の師蘭軒について

調べるといっておきながら）においても，息子たち榛軒，柏軒，孫の棠軒の代まで実にゆっくりとした筆運びで叙述を展開している。大岡昇平によれば，日本で最初に本格的な歴史文学論を書いた岩上順一は「『伊澤蘭軒』『澀江抽斎』は，主人公自身の生活だけではなくその友人，子孫まで描くことによって，維新の動乱期から，明治末の庶民生活の安定期までの日本の社会を表わしたという説である」。大岡自身普段は鷗外に厳しいのであるが，この点については次のように大変高い評価を示している。

> これらの史伝は対象たる人物の一生だけではなく，その子孫の代まで追及したのが特徴である。厳密な考証的方法によって人間の自然が浮き彫りにされているだけではなく，江戸，明治，大正三代にまたがった動乱の時代における，平凡な日本人の群像を示すことになった。これはむろん日本で初めての試みであり，世界文学に例のない大壁画が完成されたのである。

この大壁画に描かれているのは抽斎とその子孫，あるいは蘭軒と彼の子孫だけではない。江戸時代後期の儒家，医師，文人などが次々に登場するばかりでなく，その一人一人の系譜などが時には均衡を失するのではないかと思われる程詳細に叙述されていく。しかしそれは読み進んで行くうちに，実は鷗外がこうした重層的な人物の系譜や関係を積み重ねながら，多くの場合埋れていた人々，忘れられていた人々（抽斎や蘭軒はもし鷗外が掘り起こさなければ，おそらく今でも忘れられた学者であったろうという論者もいる）に限りない愛惜を感じ共感を抱いていたことが明らかとなり，さらにはそれらがまとまってみると一つの雄大な叙事詩の中に定着していると感じられるのである。それは多くの支流が注ぎ込む広くて深い流れのゆったりとした大河のようであり，富士川英郎は「大河史伝」とさえ呼んでいる。

鷗外自身こうした方法が新しい方法であることを十分に自覚していた。『伊澤蘭軒』の筆を措くにあたり，自らの試みた叙法について感慨を述べている。

> わたくしの叙法には猶一の稍人に殊なるものがあるとおもふ。是は何の誇尚（くわしやう）すべき事でもない。否，全く無用の労であつたかも知れない。しかしわたくしは抽斎を伝ふるに当つて始て此に著力し，蘭軒を伝ふるに至つてわたくしの筆は此方面に向つて前に倍する発展を遂げた。
>
> 一人の事蹟を叙して其死に至つて足れりとせず，其人の裔孫のいかになりゆくかを追蹤して現今に及ぶことが即ち是である。
>
> 前人の伝記若くは墓誌は子を説き孫を説くを例としてゐる。しかしそれは名字存没等を附記するに過ぎない。わたくしはこれに反して前代の父祖の事蹟に，早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐるのを見，其糸を断つことをなさずして，組職（そしよく）の全体を保存せむと欲し，叙事を継続して同世の状態に及ぶのである。

鷗外は『澀江抽斎』でも「大抵伝記とは其人の死を以て終るを例とする。しかし古人を景仰（けいかう）するものは，其苗裔（べうえい）がどうなつたかと云ふことを問はずにはゐられない」と言っている。これを言ってみれば史伝の縦の流れとすると，横の拡りは友人，知人，師たちの事蹟である。この方法も『澀江

抽斎』で確立された。抽斎の父允成について述べた後鷗外は抽斎の経学の師市野迷庵，狩谷棭斎，医学の師伊澤蘭軒，痘科の師池田京水，年長者として儒者・国学者たち，安積艮斎，小島成斎，岡本況斎，海保漁村ら，医家では多紀の本栖家就中茝庭，蘭軒の長子榛軒，芸術家・批評家の谷文晁，長島五郎作，石塚重兵衛，また友人森枳園などを詳述する。

さて其抽斎が生れて来た境界はどうであるか。允成の庭の訓が信頼するに足るものであつたことは，言を須たぬであらう。オロスコピイは人の生れた時の星象を観測する。わたくしは当時の社会にはどう云ふ人物がゐたかと問うて，こゝに学問藝術界の列宿を数へて見たい。しかし観察が徒に汎きに失せぬために，わたくしは他年抽斎が直接に交通すべき人物に限つて観察することゝしたい。即ち抽斎の師となり，又年上の友となる人物である。抽斎から見ての大己である。

これは社会史における踏査分析をふまえたプロソポグラフィあるいは集団的伝記でなくて何であろう。プロソポグラフィというとルイス・ネイミア等の十八世紀イングランド「庶民院」の研究やローマの「元老院」のメンバーの伝記を通した研究などが想起されるが，鷗外の史伝は澀江家あるいは伊澤家を軸にしながらその周囲にできうる限りの小伝を配することによって当時のインテリのプロソポグラフィを叙することを目指しているといえるのである。これは実に斬新な手法であったといわねばならない。

鷗外の手法は単に伝記を積み重ねていくだけではない。その中で当時のインテリたちの生活や風習が自ら浮び上がってくるところに特徴がある。小堀桂一郎は「歴史家としての鷗外」という講演の中で『伊澤蘭軒』について「蘭軒の場合医学者であり，かつ考証学者であつた人でありますが，これを江戸時代の知識人の一つの代表例と見てよろしく，その知識人の日常生活の情景がまことに丁寧に描写されてゐる。当時の人達が弟子をとる場合どういふ形式を踏んでとり，そして書生を養ふとは一体どういつた事であつたのか，学者である主人の蘭軒の平生の衣食住はどういふ形のものであつたか，普通の政治史にはもちろん文化史にも学藝史にも載つてゐない，そんなことが実に詳細に書いてあるわけであります」と指摘しているが，こうした側面も含めてクリフォード・ギアーツのいう「厚い記述」の好例といってよいかもしれない。

鷗外の「厚い記述」を読み進むにつれて，私の徳川時代のイメージ（すくなくとも後期の）が大きく変えられた。もちろんそこには庶民の中でも百姓農民などの姿は全くといってよいほど現れない。職人も幾つかのエピソードにかろうじて登場してくるにすぎない。そうしたなかで商家の人々は多く登場してくるし，しかも時にはとても重要な役割を担っている。例えば，抽斎の後添いの五百は商家の娘であったし，また狩谷棭斎をはじめ商人の学者，文人が，武士の学者たちとほとんど対等に交際している。先に菅茶山と伊澤蘭軒との朝顔をめぐるエピソードに関して言及したが，文人同士，学者同士の交際がどんなものであったか，鷗外はおそらく羨望の気持を抱きながら描写し

ている。当時の人々は春は桜，夏は花火，秋は月，冬は雪などを風流にまかせて集って愛でた。向島の花見や墨田川の舟遊びなどを叙述する鷗外の筆は淡々としてはいるが，文明批評の趣きもある。例えば文化二年

七月十五日に蘭軒は木村文河と倶に，お茶の水から舟に乗つて，小石川を溯つた。此等の河流も今の如きどぶでは無かつただらう。三絶句の一に，「墨水納涼人賸有，礫川吾輩独能来」と云つてある。墨水の俗を避け，礫川の雅に就いたのである。

という一節は，蘭軒たちの美意識の一端を見るという一方，鷗外の孤高をも感じさせる。（もっとも蘭軒らは墨田川の花見や花火に行かなかった訳ではない）。

『澀江抽斎』を読む人の多くは，抽斎の後妻で，保の母五百の女性としての魅力に感動する。三島由紀夫なども「『澀江抽斎』で奥さんが風呂場から泥棒を腰巻一つで追つかける，あそこにほんとうに感動した」と述懐しているが，この五百は抽斎が三度目の妻を亡くした時に，知人を介して自ら抽斎の妻に売り込んだのだが，蘭軒の子柏軒の妻たかも「女のしかけた恋」であった。

たかの気質は男子に似てゐた。言語には尋常女子の敢て口にせざる詞があり，挙措には尋常女子の敢て作さざる振舞があつた。……これを読むものは，たかの性行中より，彷彿として所謂新しき女の面影を認むるであらう。後に抽斎に嫁した山内氏五百も亦同じである。此二人は皆自ら夫を択んだ女である。わたくしは所謂新しき女は明治大正に至つて始て出でたのではなく，昔より有つたと謂ふ。そしてわたくしの用ゐる此称には貶斥の意は含まれてをらぬのである。

数年前に鷗外は，中国の故事を用いて『魚玄機』という作品を書き，この中で新しい女を描いている。この小品は中国の文献を利用して歴史小説の体裁をとってはいるが，実は平塚らいてうを念頭に置いていたらしい。当時のフェミニズミに共感を抱いていたか否かを別にして，鷗外が強い関心を示しており，それが江戸時代にもその先駆者を発見したことによって，ついこのような文章になったのであろうが，読んでいて微笑がでるところである。ついでのことではあるが，石川淳の『森鷗外』は大変な名著であり，私もずいぶんと影響を受け何度も読んだ作品である。しかし「鷗外晩年の史傳は『雁』『キタ・セクスアリス』ほど讀者の數を持ちえないにきまつてゐる。むつかしい字が使つてあるせゐでもなく，はなしがしぶいせゐでもなく，努力のきびしさが婦女童幼の智能に適さないからである」と言っているのはいかがなものであろうか。

その他医家の人々が薬草を栽培し，また郊外に採薬に出かける様子，豚肉を食らう話など多くのエピソードがあり，新鮮な感銘を受けたが，ここでなお二，三の例を引いて鷗外の風俗，生活へのなみなみならぬ関心を示しておきたい。その一つは斬髪についてである。

此年〔明治四年〕十二月三日に保と脩とが同時に斬髪をした。……紫の紐を以て髻を結ふのが，当時の官吏の頭飾で，優が何時まで其髻を愛惜したかわからない。人は或は抽斎の子供が何時斬髪したかを問ふことを須ゐぬと云ふかもしれない。しかし明治の初に男子が髪を斬

つたのは，独逸十八世紀のツオツプフが前に断たれ，清朝の辮髪が後に断たれたと同じく，風俗の大変遷である。然るに後の史家は其年月を知るに苦しむかも知れない。わたくしの如きは自己の髪を斬つた年を記してゐない。保さんの日記の一条を此に採録する所以である。

ここには風俗史家・社会史家としての鷗外の面目躍如たるものがある。尚古家（アンティクエリアン）といってもよいかもしれない。この風俗への関心はさらに積極的な言説としても表れ，民衆文化の評価にも見られる。ある武士の家で行われた「茶番」（素人芝居）について詳説した後

茶番が此の如く当時の士人の家に行はれたのは，文明史上の事実である。何れの国何れの世にも，民間藝術はある。茶番と称する擬劇も亦其一である。……

わたくしは小野の家の茶番が，河原崎座の吾嬬下五十三次興業と同時であつたことを言つた。然らば茶番の時は即ち八月狂言の時で，八月狂言の時は即ちスタアリングの率ゐた英艦隊の長崎に来舶してゐた時である。人或はその佚楽戯嬉の時にあらざるを思つて，茶番の彼人々の間に催されたのを怪むであらう。しかしそれは民衆心理を解せざるものである。上に病弱なる将軍家定を戴き，外よりは列強の来り薄るに会しても，府城の下に遊廓劇場の賑つたことは平日の如く，士庶の家に飲讌等の行はれたことも亦平日の如くであつただらう。近く我国は支那と戦ひ露西亜と戦つたが，其間民衆は戯嬉を忘れなかつた。啻に然るのみならず，出征軍陣営中の演劇は到る処に盛であつた。

この文章は『伊澤蘭軒』にあるが，鷗外は『澀江抽斎』の中で次のようにも書いている。

抽斎が後劇を愛するに至つたのは，当時の人の眼より観れば，一の癖好であつた。だうらくであつた。啻に当時に於て然るのみではない。是の如くに物を観る眼は，今も猶教育家等の間に，前代の遺物として伝へられてゐる。わたくしは嘗て歴史の教科書に，近松，竹田の脚本，馬琴，京伝の小説が出て，風俗の頽敗を致したと書いてあるのを見た。

しかし詩の変体としてこれを視れば，脚本，小説の価値も認めずには置かれず，脚本に縁つて演じ出す劇も，高級藝術として尊重しなくてはならなくなる。

森鷗外の史伝は大部分新聞の連載であった。（北條霞亭は中途で連載が打ち切られ『帝国文学』『アララギ』へと発表場所が移っている）。そのため，執筆の過程で新しい情報，史料が入手されることも多かった。そういう時に鷗外は話を過去へ遡らせることも珍しくなかった。これは映画のフラッシュ・バックのような技法を想起させる。もとより鷗外は最初からこうした構想を抱いていたわけではなかったのだろうが，叙述に及んでこのようなスタイルが自分の求めている最終的な体系に必ずしも不適合であるわけではないことを確信していたに違いない。この意味で史伝は「開かれた叙述」である。大岡昇平は「『澀江抽斎』には対象の発見とともに，方法の発見の喜びが感じられる」といっているが，この「開かれた叙述」もまた鷗外が結果的に発見した方法であった。

鷗外は『伊澤蘭軒』の中で「科学の迹は述作に由つて追尋するより外に道が無い」と信念を吐露したが，しかも口碑，伝聞を用いることによって作品に馥郁たる香気を与え，同時に真実に迫ろう

とした。また雄大な流れの中に多くの人物を配し，時代の移り変り，人々の人生の移り変り，意識の変転を描くことを通じて社会史に先鞭をつけた。ピーター・ゲイの文頭に引いた文章「スタイルは，科学する歴史家の芸術である」は鷗外においてもまさに至言である。

〈参　考　文　献〉

『鷗外全集』（岩波書店）
『鷗外選集』（岩波書店）
『文芸読本森鷗外』（河出書房新社　1976年）
稲垣達郎『森鷗外の歴史小説』（岩波書店　1989年）
尾形　仂『森鷗外の歴史小説史料と方法』（筑摩書房　1979年）
『石川淳全集』（筑摩書房）
『唐木順三全集』（筑摩書房）
小堀桂一郎『鷗外とその周辺』（明治書院　1981年）
富士川英郎『鷗外雑志』（小澤書店　1983年）
『明治史論集㈡』（筑摩書房　1976年）
大岡昇平『歴史小説論』（岩波書店　1990年）
Paul Thompson, *The voice of the past : oral history* (*2nd* edition, Oxford University Press, 1988.)

（東京大学教養学部助教授）

鷗外の引用は『選集』によった。